

# 松島先生の水彩画

藤川 賢

自慢から始めて恐縮だが、私は、松島先生、遠藤先生、水谷先生という社会学部の三大画伯から絵をいただいたことがある。

その最初が松島先生だった。まだ、着任して二年目か三年目、学部懇親会幹事を担当した時のことである。図々しいお願いながら、くじ引きの賞品として小品を一枚提供していただけないかとうかがったところ、ご快諾くださった上、私にも一枚選ばせてくださった。

その時、かなりの数の水彩画を拝見して、なぜか松島先生の絵は俳句のようだと感じた。色彩はむしろ華やかなものが多く、画風も明るいので、「俳画」に近いということではない。主題があり、構図がありながら、一つの筆致が自由で簡潔な印象は、俳句における写生に近いと思ったのである。先生が俳句ではなく短歌の研究をなさっていることを知ったのは後のことである。

俳句との連想からか、松島先生ご自身も、初心者に「まず自由に十七文字で書いてごらん」という宗匠のように感じてきた。それは、先生の風貌や日常のお言葉にも違和感がなかった。先生が実際にそういう教育をなさっておられたのかどうか存じ上げないが、私自身は、学科の大先輩としてそれに近い指導、というより援助を、受

けてきたように思う。

たとえば五七五という俳句の字数のような制約の中で、自由な表現を求めることが芸術だとすれば、松島先生はそういう自由を大切にしてくられたのではないか。といってもご自身が自由にふるまうのではなく、学生諸君ができるだけ自由に学べることを大事にするということである。その姿勢は、教育や研究の場面にも一貫しておられるように思う。会議等での発言も、多くは、規制や処分をやらねるためのものだったと記憶している。

そうして考えてみると、ゼミの学生でもないのに、こうした先生の姿勢にずいぶんと甘えてきた。たとえば、ゼミオリ委員でゼミ選択に迷う学生の相談にのっていた時、関心や熱意はあるのだが体系や形式に沿って書いてきたり考えたりするのが苦手な二年生には、松島先生のゼミを薦めることが多かった。このゼミであれば、こう書かなくてはいけない、とか、こう解釈すべきだと押しつけられずに、印象に残ったものを自由に描くところから始められるのではないかと感じたからである。こうした学生たちは、おそらく成績はあまり芳しくなく、指導もたいていへんだったのではないかと思うが、気がついていたかぎり、どの方も立派に卒業式まで送り出していただいた。もちろん、芸術も学問も自由に表現することだけで終始することはない。沖縄文学研究などに代表される学問の体系やそれに対する情熱こそ、松島先生の研究の真髄というべきだろう。不敏にして、それに触れることなく、優しい一面にのみ接し、甘えてきたことには、忸怩たるものがある。だが、絵に主題とは別に画風があるように、他者の自由を守ろうとする穏やかな姿勢も先生の中で一貫するもののように感じ、古きよき時代の面影を残した、先生のこうしたお人柄に触れたことは貴重だったと改めて感謝申し上げている。

今、秋を迎え、来春のご退任までの月日の短さを思う。と同時に、来年以降も、教育、研究、そして芸術など

あらゆる面を通して、白金の地に先生の優しさと情熱を伝え続けていただければと願っている。

秋桜の濃きも薄きも色かえず

松島先生の水彩画